



理事會だより (3・11オービックビルにて)

一、各部報告 総務部…来年度の会員数は今年度より若干減少見込み、開成グループ解散。事業部…桜まつりの投句は一八三名三〇五組と過去を大幅に上回った。会計部…梅の里さん俳句大会の収支報告。

二、定期総会議案書(事業報告・計画、決算・予算)につき各部の報告を受け質疑後承認。

三、文化祭に代わる秋の俳句大会につき長谷川副会長(事業部長)の、十一月三日「令和3年度小田原文化の日俳句大会」としてUMECOにて実施するとの提案を審議の結果承認。協会員以外からも広く投句募集する。なお会長より、コロナ感染状況では再検討もあり得るとの発言。

四、佃悦夫第4代会長の「俳句の岸边」につき会長から、退任記念として冊子の発行および山田副会長を責任者、村場・宝子山部長を副責任者、佐々木・長谷川部長を委員として推進することが提案され承認。

「俳句おだわら」10句抄 (643号より)

瀬戸正洋 抄出

履物を平たく揃へ女正月
初富士に心無にして袴りけり
夕鴉声を捨てゆく冬田かな
鳥声や雲押し分くる初日の出
陽炎を削って削って杜に入る
むらあやでこもひよこたま業平忌
冬の太陽でんから俺は老人だった
冬の雨大井丘陵毘だった
寂しさの真ん中黄色どんどの火
石蹴れば寒い音して止まりけり

鳥海壮六 抄出

呉服屋の長き暖簾や雪中花
歌ひ手も指揮者も白衣クリスマス
やまびこの還るに間合ひ山眠る
女正月厨の夫の一人ごと
数え日と言いつつ今日も暮れにけり
七種や箸柔らかく使ひたる
口笛に犬を呼びたる枯野かな
夕鴉声を捨てゆく冬田かな
留守電の声若き母冬の夜
石蹴れば寒い音して止まりけり

寶子山京子	香川 花子	島 梅乃	村場 十五	佃 悦夫	小島ノブヨシ	大石 雄介	大石 和子	杉山あけみ	田畑ヒロ子
竹下由里子	小澤 純子	池田 忠山	中野 文子	小瀬村信子	新井たか志	瀬戸 りん	島 梅乃	大沢 年子	田畑ヒロ子

令和二年度年間ベスト一句集鑑賞

(一句鑑賞のほか二句抄出)

光り合ふ小さき言葉や木の芽吹く 近藤 久江

木の芽が吹く季節になり、色や形を織り交ぜ、風にゆらぎ又音符のやうに歌を奏でているようでもある孫(小五)が来た時、俳句のきまりを教えたら、「山なみがもえ木色なり木の芽吹き」と歌い感心した。作者の「光り合ふ小さき言葉」は正に芽吹ききの神髄を云い得て感動しました。

人類は進化の途中冬銀河
大空は雲の遊び場野にあそぶ

尾崎 竹詩
澤口 文子

日焼子のまなこ一途に日記書く

中根 和子

小学生低学年くらいか。夏休み、真っ黒に日焼けした子が一心不乱に絵日記を書いている。何の絵を、どんな文章を書いているのか。海水浴、虫取り、それともサッカーのことか。想像がどんどん膨らむ。日焼けした肌に眼の白。穢れない白さ。机上にはクレヨンか色鉛筆か。様々な色が散乱している光景が浮かぶ。子の真っ直ぐな姿と作者の優しい眼差しが感じられる大好きな句です。

かなかなや山のホテルのミルクティー 田中 幸子
少しだけ魔女になったやサングラス 和田恵美子

(石井きよ子)

柿熟れる人は未完のまま老いて 加藤かほる

「未完」という言葉で、柿が羨ましいと思った。明日か、10年後か消えていく私がいる。これからどうやって生きていく?元氣なうちに考えなくちゃ。いろんな事を忘れてしまってもニコニコしているおばあさんになろう。そんな事を考え、大きな声で句をよんでみた。涙が止まらなかつた。
松過ぎの玄関二人だけの靴
新藁に兎の沈みたる寝息かな

片野 秋子
若村 京子

一月のほら温室が浮いてゐる

(奥津ちわき)
寶子山京子

一月の田園風景は何とも殺風景である。草木も土も枯れ色一色。なんとも味気ない。そんな中に灯りをともしつゝ温室が目につく。それはこの世の季節や重力の影響圏の外にある。「ほら」が感性を増幅していて面白い。何もかも兄が教師の夏休み
泥葱を皮剥けば無罪なり

門松 鳳文
田畑ヒロ子

かなかなや山のホテルのミルクティー

(尾崎 竹詩)
田中 幸子

難しい言葉を使わず単純明瞭な句ですが、とても惹かれました。夏の盛りの蝉と違い秋の蝉は、蛸、法師蟬など鳴き声に哀調を帯び、特にかなかなは秋冬に向かつての寂しさを予感させます。かなかなでなかつたらまた違う感慨を受けたと思います。

私も若いころは秋の高原が好きでよく出かけました。今の自粛生活とわが老いを一瞬忘れ、豊かな気持ちになりました。

走り梅雨返品します布マスク
菜の花や手を振る人にふり返す

菅野 英余
山崎美知子
(勝木 澄子)

女正月少し明るき紅をさす

暮れから正月にかけてずっと忙しい日々を送って来た女性がほっと一息つく女正月。楽しいはずが今年は新型コロナウイルス感染症の為マスク着用の毎日、家にこもりうつとういしい日々を送っていた事でしよう。さあ気分も新たに薄化粧をし、三密をさけ久しぶり外出、友と語り合い楽しい一時をすごした事でしよう。コロナに破壊された生活。一日も早い収束が待たれる今日です。

花芒風になり切る風の貌
せせらぎや肺の中まで青葉風

足立 和子
豊田 幸枝

縫物に励む尼さまなつめの実

舞台は住職一人の小さな尼寺である。とは言え、決して寂れた寺ではなく、近所の子供や女たちが遊んだり、相談事や世間話をしたりしにやってくる。尼さんは縫物をしながら子供たちの様子を見、話しの相手をしている。大上段に仏の教えを説くわけではないが、

(小宮 早苗)
植松テル子

社会のセイフティーネットになっていた。そんな良き寺の姿を彷彿とさせる句である。尼さまとなつめの実が効果的である。

有耶無耶もよしほうたる追うもよし
てつぺんかけたか母また泣かせたか

中山 妙子
畠 梅乃
(庄司 下載)

青焼きの間取り図古りぬ法師蟬

棚の箱から出てきた一枚の間取り図。青色は褪せてはいないが三十年いや四十年も前の物。マイホームを建てる時、リビングは書斎はといろいろ考えた間取り図だ。今子供は独立し家族の形も変わったが、この家で過ごした家族の時間を懐しく思い出す。

古りぬに焦点を当て、また残暑の中忙しく鳴く法師蟬が一抹の寂しさを醸して、味わい深い句と読みました。猫が貌洗ふ風鈴しまはむか
大空の端に始まる夕立かな

杉崎 せつ
肥後ちさこ
(高橋久美子)

一輪の竜胆だった池内淳子

深秋の空の色そのままに青く、竜胆は他の秋の花が霜枯れしても秋遅くまで凛と咲き誇っています。私はこの花が好きです。

一輪の竜胆と池内淳子さんの組合せが絶妙で、相互に響き合って素晴らしい一つの世界を作っているように思います。

伊藤 道郎

人間の強さ、淋しさ、内面に秘めた美しさなど、強く触れられた一句でした。

ひとり居の兄の晩酌青葉木菟
日焼子もまなこ一途に日記書く

小林永以子
中根 和子

冬波のへの字への字や辺野古沖

(中村 裕子)
出澤 洋子

ザ沖縄の海という句である。確かに波は、本島も離島も穏やかに、への字を寄せている。マリンプールの海は美しい。

その反面人間の為せる業は、基地問題を今にのこしている。永久の平和を願い、への字の波の印象も佳い句です。

一輪の竜胆だった池内淳子
年重ね思い重ねて実むらさき

伊藤 道郎
高橋みどり

少しだけ魔女になりたきサングラス 和田恵美子

(山口 千代)

夏の強い紫外線より目を守るサングラス。そのサングラス越しの世界は、気分もひと味違う気がします。そこで、魔法の世界をのぞき魔女になってみたいと楽しい句ですね。どのような世界か、想像するだけでもどきどきわくわくします。

梔子の白きに勝る香りかな
大空は雲の遊び場野にあそぶ

坂入清四郎
澤口 文子

(吉田 百代)

俳句おだわら (3・19メ切り、到着順)

◆鹿火屋 (2・26)

久江報

佐助や掌に鎮めゐる黒茶碗

足立 和子

手捻りの大鉢の藍春めけり

川本 育子

黄に染めしミモザの空の冴返る

高橋 小糸

二月富士双手を挙げて深呼吸

山崎 悦子

路の臺結界に生る二つ三つ

近藤 久江

◆青梅 (3・10)

幸子報

桃節句畑の道も人集う

大塚 行人

過去はさもあらばあれ春彼岸すぎゆき

神野美代子

春二番流る酒匂の波の角つう

湯本とし子

百歳の浄土へ架かる春の虹

加藤まり子

春寒し作句に一字定まらず

久保寺トミ子

万屋の策に地玉子村の春

田渕 令子

老い先のはなし膨らむ春炬燵

田中 幸子

◆みなみ (2・13)

かほる報

丹沢の嶺や残雪神々し

村上 龍山

新ホテル十四階から春の海

加藤 富江

薄氷や六法全書捨てられず

豊田 幸枝

白酒に酔うているのか弥次郎兵衛

市川めぐみ

禅林の常の水音春来る

薄氷の融けゆくごとく猫逝きぬ

春立つや城下は青き風の中

薄氷や忍者のように姿消し

老なれどカロリー学ぶ菠薐草

茹で汁に陽の匂いしてほうれん草

◆沈丁(3・6)

族の血脈々とある種井かな

臘月残る未練の赤提灯

水の精日の精重し種俵

天地の見えざる力種浸

旧屋の土間に代代種井かな

春暁や夢でシャンソン口ずさみ

これほどの褒美のあるや春の虹

狭庭さなわでもデッサン描く種をまく

やわらかく窪む堀跡種俵

故郷の景色も運ぶ水菜漬

雨降れば雨の明るさ花菜畑

仕舞湯に浸してありぬ粉袋

◆香雨・梅ごち(2・21)

鶯のもうひと声に耳澄ます

斎藤 静

加藤 健治

飯田 愛

小瀬村信子

加藤れい子

加藤かほる

文子報

寶子山京子

牧石美千雄

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

瀧本 敦子

勝木 澄子

菅野 英余

高井 幸子

片野 節子

中野 文子

忠山報

肥後ちさこ

兄弟の水切りあそび水温む

温泉に手足を伸ばし春の月

逆さ富士かすかにゆらぎ水温む

すべりよきカーテンレール春きざす

水温む一便増えて渡し舟

春の夜のときれては鳴るオルゴール

下萌うみや流るる水の音たてず

湖うみへ向くバージンロード風光る

◆こよろぎ(3・11)

富士を背に菜の花咲くや吾妻山

川底の石をつぶさに百千鳥

山焼の炎が走る人走る

◆春野(3・11)

抱卵の鶏の半眼うらけし

春ねむしオルガン低く流れくる

回覧板受け取るさへもマスクして

言霊のたくする国ぞ薺打つ

春の蠅水かげろふに囚はれて

亀鳴くや墓場へもってゆく話

食べこぼす豆に鳩来る良寛忌

◆おほぬ(3・10)

関戸わよこ

青山 典子

門松 鳳文

吉田 百代

吉田 康雄

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

きよ志報

瀬戸 悠

二見 和江

内田知江子

秋山 昇

伊藤はる子

尾崎 一夫

長谷川きよ志

昌男報

木の芽雨明日がゆつくり立ち上る

椿落つもうたくさんだ家籠り

蠹きて覗き見している露の臺

ゆるゆると心ほどけし雛祭り

雪柳風と奏でるシンフォニー

春一番雲百態を追ひ払う

花ふむいつしか風の丸くなる

道真に心かよわせ梅花祭

人の世がどう足掻くとも花は咲く

つじつまの合わせぬ世の中春の塵

紅梅や西日と遊ぶ小鳥どち

老僧の法話ゆたかに桜満つ

我が道に寄り添う友や姥桜

路味噌の味も香りもははに似る

◆山北(2・20)

春の服遊び心のよみがえる

下萌えやつかまり立ちの太き足

山霞む何か足りない休刊日

寒餅や齒なしばあさん話好き

初鳴きと思えば友の電子辞書

浅き春仮面のならぶ理髪店

中根登美子

中村 昌男

廣田 悦子

二上 光子

石井きよ子

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

風間 秀泰

加藤 春江

坂入清四郎

瀬戸とみ子

高橋みどり

中津川春江

由里子報

和田恵美子

石田加津子

尾崎 幸子

柳川 楊雨

尾崎 竹詩

中山 妙子

常備薬の消費期限や春の泥

◆開成(3・8)

読み止しの本の重さや春の昼

薄氷やすべてなつかし夫のメモ

道端にひっそりと咲く堇かな

逞しく荒地に広げしすみれ咲く

◆たけのこ(3・13)

掛け替へす桜の軸はちちの作

天婦羅もおつなるものや葱坊主

潮の香を存分に吸ひ磯遊び

落ちてなほ姿崩さぬ椿かな

潮目読むやうやく慣れし鹿尾採

◆実のり(3・18)

春炬燵繰り返し読む俳句の書

赤べこの首ふる出窓山笑ふ

切り岸を大きく廻り燕来る

シクラメンの炎極まる地下喫茶

◆鷹(3・12)

春の夜の無人回転木馬かな

月光の切つ先ゆるむ二月尽

いつの間の指の血豆春寒し

竹下由里子

ちわき報

遠藤シヅ子

下澤 操子

濱本 主雄

奥津ちわき

悦女報

三木 泰子

徳田 公子

久津間百合子

小宮 早苗

宮崎 悦女

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

雨水を湛ふる甕や梅月夜
 なほ使ふ古き切手よ昭和の日
 バケツ手にスキップする子水温む
 三桮の鹿の高さに花喰はれ
 モザイクの羊の壁画草萌ゆる
 梅香り呂色に暮るる城下かな
 野遊の母と唱歌を歌ひけり
 蹲の水かげろふや春障子
 放牧の羊鳴きあふ蕨かな
 海いちめん眩し佐保姫降り来たる
 朝月に並みし土星や抱卵期
 啓蟄の関東平野あまねく雨
 八方に木魂割れけり枯木山
 午後の日の広ぐる部屋や毛糸編む
 重曹に磨く銀盆荷風の忌
 広つばの空は四角や猫の恋
 居酒屋の路地よりぬつと猫の恋
 夕富士や耕人ひとり小さくあり
 松原に満つる波音鶴引きぬ
 渡し場の煌めく水面仏生会
 饅頭を夫と分け合ふ梅見かな

佐宗 欣二
 須田 晴美
 中田 笑子
 百川 秀子
 山崎美知子
 庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 畠 梅乃
 山口安規子
 市川 好子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 高橋 正子
 西村 英子
 米山 翠
 大木 敬子

広目屋についてつたあの桜東風
 せせらぎの音を育む雪解かな
 やをら出だす鷺の片足寒の明
 天ぷらに庭の明日葉摘みにけり
 畦道に軽トラ二台葱坊主
 花びらとなりて自由や山桜
 春日傘母に片寄せ歌舞伎座へ
 「見に来て」と今年も呼びに雛節
 母老いてつましき暮し蜆汁
 太陽に親はゐるのか春日傘
 独り来て踊り子の道葱坊主
 引鴨や風癖つきし磧草
 斜度三十上れば畑葱坊主

◆零(3・18)

菜の花の故郷眺め墓掃除
 救急車・雷あなおそろしき春の夕
 ふるさとの川で蜆をとったつけ
 コップ酒おひとりさまの花見です
 瀬田蜆汁碗の一個ひきこもり
 遺書に秘す子への詫び言しじみ汁
 群がって囁きあつて春の鯉

加藤 幾代
 北崎 修
 守屋 まち
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環
 近藤 絢子
 下平 美子
 杉崎 せつ
 鳥海 壮六
 古屋 徳男
 村場 十五
 道郎報
 青木たけを
 川合 昌子
 井上 良子
 木村 和彦
 佐藤 正子
 岡本 史郎
 中村 裕子

改葬終り多忙を詫びる彼岸かな
春は酸っぱし青年海へトランペット

野川木一路
伊藤 道郎

◆雫の会(3・19)

重満報

物干せば馴染となりし山笑う

悪相の裸足の客人であつた

春愁を拾ってくれる丹沢よ

井上 和子
佃 悦夫

佐々木重満

◆無所属

春風や子は転勤の北の国

春眠の端を小鳥に突つつかれ

里山のスローライフや亀鳴けり

たんぽぽやローカル線の匂ふ町

塗り替へし横断歩道地虫出づ

大木の寒気を泳ぎ倒れけり

コロナ禍の離れて座する内裏雛

音痴なる声をひそめて春の歌

女湯にひとり沐浴春近し

鶯とうたっていたよ童唄

鳥の影さつと二月の跨線橋

潮騒は春の音きみを讃えたり

春布団干しくぐもれば胎蔵界

COVID-19 弥生とりまく閉塞感

蓑宮 わか

小林永以子

山口 千代

北村 文江

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

澤口 文子

鈴木久美子

木村美千代

石田 和代

山田 照子

穂坂志げる

田畑ヒロ子

小澤 園子

いのちなきいのちに灯る春の星
知らぬ鳥けと鳴く草もけと青む

須田 聡子
大石 雄介

本当は吹き荒れている猫柳

大石 和子

白蓮のふくらみ割れる音を聴く

岩楯恵津子

BAR「無気力」黒いマスクの女かな瀬戸

正洋

春の泥跳んでわたしはカンガルー

杉山あけみ

ケチャップが付いた口元雛揃う

岡田 典代

眉剃り落し雪女郎になる途中

小島ノブヨシ

◆お詫びと訂正◆

644号 2頁上段三行目 鳩↓鳩

理事会日程 4 / 8 5 / 13 6 / 11

第68回定期総会 4 / 22

いずれも木曜日午後六時からけやき

※お知らせ

例年七月開催の山北滝まつり俳句大会は
令和三年度中止となりました。

(山北町俳句協会)